

◎先人の人生に学ぶ

連載「四字熟語の愉しみ」 web 円水社+ <http://www.ensuisha.co.jp/plus/>

2017年2月の「四字熟語の愉しみ」は

「左道傍門」「満腹経綸」「石破天驚」「食生怕死」
を書きました。

「左道傍門」(さどうぼうもん) 2017・02・01

左は邪で正統でない流派が左道、傍は不正で正当でない体系が傍門、そこで「左道傍門」(『封神演義「七二回」』など)は、正統派でない宗派や学術の流派、正常でないものごとについています。古くから「左道をとれば政を乱す」(『礼記「王制」』)といわれ、傍門八十、左道三千といえますから、本家本元でないもの(太極拳では本系本元)がいかにかかかります。

おもしろいのは左道や傍門のほうなのでドラマや小説になっていますし、「左道書道」や「左道茶具」などには独特の味わいを感じます。「左道財神」なら蓄財の奥義を教えてください。中道正統派からは、非主流の左派は「左道傍門」で右派は「邪道歪門」という評も現われます。「左道傍門」については、リオ・オリンピックで示されたブラジル人の陽気な「いい加減さ文化」を思いあわせていただくと分かりやすいでしょう。

アメリカの対中戦略の「左道傍門」となるといい加減とはいえませんが。

「満腹経綸」(まんぷくけいりん) 2017・02・08

「経綸」はすでに『周易「屯」』に「君子は経綸を以てす」とありますから経歴の長さが知られることばですが、「経」は絹糸を並べて織機の台に据え付けたタテ糸で、「綸」は糸をよりあわせること。二文字を合わせて国家を治め整えるという意味を表します。それが「満腹」をつけて「満腹経綸」(洪炎『西渡詩集』など)となったのは、経綸だけでは経綸にならなくなった事情があったのでしょう。

「満腹」には疑惑にみたされている「満腹狐疑」や不平で心中おだやかでない「満腹牢騷」などもあります。どれが先かはわかりませんが、「狐疑」は屈原の「離騷」にありますし「牢騷」となると表裏の気配すらあります。宋代の用例が多いようです。

ここでは「満腹中枢」のおかしな政治リーダーの命令の経綸のなさをいいたかったまでのこと。わが近代国家の秩序を整える方策を紳士君、豪傑君、南海先生が酒席で論じた『三酔人経綸問答』(中江兆民・1887年)の筋のよさが知られます。

「石破天驚」(せきはてんきょう) 2017・2・15

唐代の鬼才李賀が詩的感性の冴えを示して、石を破って天を驚かせるという「石破天驚」(李賀「李憑箜篌引」から)という表現を用いたのは、李憑が奏する外来の弦楽器箜篌(くご)から撥き出された音色が、かつてだれによっても表出されなかった新奇で意想不到的情域に達していた

からでしょう。伝説の女媧が五色の石を練って天を補修した、その補石を破って溢れ出して天を驚かせたというこの四字成語は、詩文や演奏ばかりでなく、世の中を震撼させるほどの内容をもつまぎざまな事象で用いられています。

たとえば、岩を掘削して彫り出した雲崗や龍門石窟の仏像群は「石破天驚」の文化遺産ですし、逆に石づくりの摩天楼もそうでしょうし、一転してスイス製の時計や日本製のカメラ・レンズといった精密機械にもいわれますし、サッカーで敵の固いディフェンスの壁を破って矢のようにゴールに飛び込んだキックなどにもいわれます。女媧の補天にちなんで客家の人びとは農曆1月20日を「天穿日」として祝っています。

「貪生怕死」(どんせいはいし) 2017・02・22

トランプ大統領との電話会談でにわか存在がきわだった台湾初の女性総統・蔡英文総統は、高雄の黄埔軍官学校の閱兵後の訓示で、「貪生怕死莫入此門(この門に入るなかれ)」と述べていました。生きることに執着し死ぬことを恐れるような軍人であってはならない。ご存じのように「三民主義、吾党所宗 以建民国、以進大同」ではじまる「中華民国国歌」は、1924年の黄埔軍官学校創設時の孫文の訓詞の一節です。曲折あって学校は1950年に高雄に再建されました(広州の跡地は全国文物重点保護単位に)。

敵前で「貪生怕死」(『三国演義』など)である軍隊では聞えない。「出生入死」(『韓非子』)などが反義語で、命をかけた行為にいいます。こちらをいわないのは闘争を好まない国民性があるからで、かつて台湾総督だった後藤新平も台湾人の性格に「貪生怕死」を指摘しています。国歌の「吾党」が「国民党」を指すことから、民進党の蔡英文総統が歌うかどうか話題となりましたが、総統就任の後は斉唱に加わっているようです。

2017年1月の「四字熟語の愉しみ」は

「鳳鳴朝陽」「万家灯火」「鱗次櫛比」「臘尽春回」
を書きました。

「鳳鳴朝陽」(ほうめいちょうよう) 2017・01・04

2017年は丁酉(ひのととり)年ですから、トリにちなむ四字熟語をはじめにトリあげておきましょう。年初に明るい希望を与えてくれるのは、やはり伝説のオオトリ(鵬・鳳凰・鴻)にちなむものでしょう。すでに「鵬程万里」(2013・7・31)は飛び立ちましたから、ここでは「鳳鳴朝陽」(『詩経「大雅・卷阿」』など)でしょうか。鳳凰が初日の出のときに優美に飛翔して鳴くことがあれば、天下太平の吉兆とされます。それはまた賢者が時宜を得て、正義の抱負を展開することにいわれます。

鳳は雄で凰が雌、ともに飛ぶ「鳳凰于飛」は夫婦相愛の姿とされて、婚礼の折りに家庭和睦の祝辞に用いられます。したがって「鳳鳥不至」(『論語「子罕篇」』から)となると、政治が乱れ

て希望のない世の中の例に。また「鳳起雲湧」は改革期に堂々と大義を論じること。湖南省出の楊度（ようたく）が日本留学（法政大学）時に創作した「湖南少年歌」は多くの愛国青年を鼓舞したことで、梁啓超が「鳳起雲湧」と称えています。

「万家灯火」（ばんかとうか） 2017・01・11

夜になってすべての家々に灯りが点ることを「万家灯火」（王安石「上元戲呈貢父」など）といます。都市が繁栄しているようすであり、平和が続いている証でもあり、その下での人びとの穏やかな暮らしが思われます。「日本三大夜景」には長崎・札幌（函館でなく）・神戸（「日本夜景サミット」2015で）が選ばれ、「世界三大夜景」にも香港・ナポリとともに函館か長崎かが挙げられています。中国では上海、西安、重慶を称しています。

民俗行事としては、春節（新月）のあとの望月（十五日）の夜におこなわれる「観灯」で、夜を通して門々に灯を点して過ごします（元宵節）。歳初の満月に皇帝は万人の幸せを祈り、農民は豊作を祈ったのでしょう。唐の玄宗のときの「元宵灯節」が最も豪華で、長安中の燃灯は五万盞を数え、皇帝は広さ20間、高さ150尺の灯楼をつくらせています。白居易の詠う「灯火万家」（「江楼夕望招客」から）は、杭州刺史（長官）時代のもので、杭州の万家の灯と西湖に映る遊船の灯を「星河一道」に対比しています。

「鱗次櫛比」（りんじしつび） 2017・01・18

さかなの鱗や櫛の齒のように同形のものが整然として次々に並んでいるようすが「鱗次櫛比」（陳貞慧『秋園雜佩「蘭」』など）です。建物やお店や物品などでそういう情景を思い浮かべることができます。古いもの新しいもの、人はそういう人工物の整列した姿に安心感をもつのでしょう。発展をつづける中国では、香港、北京、上海、深圳ばかりでなく、いまや高層ビルが立ち並んでいることが発展の証とばかりに、地方都市はどこも中央部の商業圏では高層化を競い、郊外には同階同色の住宅群が「鱗次櫛比」して出現しています。現代人の安心感が都市の変容のなかに息づいています。

また古いほうでは、自然に囲まれた村落の伝統的建築群が「歴史文化名村（鎮）」として数多く保全・保護されています。たとえば貴州侗族の大利侗寨は、四周を櫛の古木に囲まれて、何百戸かの青瓦木楼が何百年となく河筋や石板古道の両側に「鱗次櫛比」して残されています。「天人合一」といった風情の平和な生活が営まれているようです。

「臘尽春回」（ろうじんしゅんかい） 2017・01・25

「臘」は臘月で農曆最後の十二月のこと。寒冷な冬の季節が終わって温暖な春の季節がまた回ってくるのが「臘尽春回」（孫道絢「菩薩蛮・梅」など）です。春節（ことしは1月28日）の祝いことばのひとつ。梅が咲き初めたり、氷雪が融けだしたり。佳節の訪れを思わせます。「それがなんで好（ハオ）なんですか、ただ浮生に一年を添えるだけじゃないか」（王炎）という声もあります。

温暖な春に回ってくればいいのですが、「臘尽冬残」となるとなお厳しさがつづくことになります。さらには春など訪れずに骨を刺すような「臘月寒風」のなかで暮らす人びと。貧困戸を少しでも支援をしようという慰問活動が春節を前に各地各所でおこなわれています。李克強首相は今年は雲南の山奥の貧困な小村をたずねて車座になって村民の話に耳を傾け激励し、お正月用品を届けて回っています。

臘梅は寒と闘いつつ花開く屈強な姿が愛でられて歴代の詩人に詠われています。

2016年12月の「四字熟語の愉しみ」は

「寒花晩節」「葉落帰根」「嗚呼哀哉」「神機妙算」

を書きました。

「寒花晩節」（かんかばんせつ）2016・12・07

寒花は寒空の下でしっかり咲いている花のことで、「寒花晩節」（『宋名臣言行録・韓琦「九日小閣」』など）は、節操を保って晩年をすごすようすに例えられます。「黄花晩節」ともいい、黄花は菊のことで、重陽節（旧暦9月9日）に高齢者の業績をたたえて用いられます。同じ意味合いで「桑榆晩景」というのは、桑や榆の梢を夕陽が斜めに照らしている情景で、桑や榆は日の落ちるところを指すことから、晩年の風姿が後人の目標として輝いているようすをいいます。

それに対して「晩節不保」は、築き上げてきた名声や評価を晩年に覆してしまうこと。終末期まで節操を保てず「晩節を汚す」ことでよく用いられています。都知事選はその舞台上、首相を務めた小泉・細川両氏が失格知事の舛添氏に敗れたことにより、猪瀬知事に辞職をうながした時に用いた石原元知事がその当人になり、その末に小池知事が誕生しましたが、花ある小池知事が「寒花晩節」を貫くことが可能かどうかは判断がむずかしいのです。

「葉落帰根」（ようらくきこん）2016・12・14

樹木の葉が、根から発した枝の先に春に芽を生じて夏に茂って秋には落ちて根に帰るようすを「葉落帰根」（『劔南詩稿「八四・寓嘆」』など）といい、人の活動やものごとが本源を忘れずに戻ること例えます。

「樹高千丈、葉落帰根」と合わせていい、中島みゆきの歌のタイトルにもなっています。中島みゆきの歌では、ひとひらの葉が空を漂いながら見知らぬ地へと流れていくけれど、最後は木の根がゆりかごを差し伸べてきつと抱きとめてくれるだろうと、孤独にたえて漂いつづけます。中国残留孤児の望郷の思いがこのことばに込められていて、瀋陽には帰国孤児と養母をつなぐ「瀋陽落葉帰根の会」があります。

それに対して「落地生根」というのは、本源の木から遠く離れた地に落ちてそこでみずからの力を信じて新たな根をつくる姿をいいます。神戸華僑歴史博物館に飾られている「落地生根」は、故郷から離れて生きる華僑の人たちの強い心情を示しています。

「嗚呼哀哉」(おこあいや) 2016・12・21

嗚呼も哉も感嘆を示す詞であり、「嗚呼哀哉」(ああ、哀しいかな、『三国志蜀志「諸葛亮伝」』など)は心底からの哀痛の極みを表現しています。唐朝を代表する書家、顔真卿の「祭姪文稿」(台北の故宮博物院蔵)は、安祿山の乱で非業の死をとげた親族の顔杲卿、季明の親子への哀惜の情を切々とつづったものですが、その文字づかいは「文は人なり」を感得させてくれるものといわれ、その中で一瞬、真卿が心を鎮めて「嗚呼哀哉」と一行に書きとめたとき、人の吐露するものの極限をきわめたといわれます。

のち顔真卿は叛軍のなかで堂々と宣諭をおこない、そのまま囚われて幽禁ののち、寺内の大イチョウの下で縊死して「嚴霜烈日」の生涯を閉じています。真卿の書体は「顔体」と呼ばれて後世の書家の範とされていますが、風格あるその楷書は明代に印刷版本の書体(明朝体)に採り入れられ、味わいある活字として今に伝えられているといえます。空海も唐の長安でその書風を学んだようです。

「神機妙算」(しんきみょうさん) 2016・12・28

「神ってる」が1916年の流行語大賞に選ばれましたが、四字熟語なら「神機妙算」(『三国演義「四六」』など)でしょうか。本人すら予測不能ながら実行して最善の結果を導き出す超人的な能力をいうのでしょうか。「神ってる」は、超人とか神ががっているとかを越えて神そのものになっているところが新語の妙味なのでしょう。

広島カープの32年ぶりセ・リーグ優勝に貢献した鈴木誠也外野手がある人で、発語者は緒方監督。「錦上添花」となる来季の年俸が3.75倍の6000万円といえます。打率10割、200本塁打、1000打点くらいが来季の目標と真顔でいうのですから、「神ってる」にはちがひありません。「神奇莫測」ともいえます。

有名なのは風の変化まで読んで仕掛けた諸葛亮の「草船借箭」の故事ですが、多くは「以弱伐強」の局面で生まれるようです。碁の盤面ではだれも予想できなかったそういう「神機妙算」の妙手が生ずることがあるようです。